

身体教育の概念とその変遷について（3）：

身体教育の消滅の経緯とその復興

○ 中野 浩一（日大工・総合）

1. 緒言

本研究は、今年度の工学部長指定研究（特別研究）個人研究発掘支援型の給付を受けた課題であり、前回の続きである。

今日、書名に「身体教育」を冠する著書が散見されるため、身体教育の概念の消滅と聞くと、奇異に感じられるかもしれない。しかし、言葉で「身体教育」といっても、その概念は身体教育ではなく、運動を通しての教育（以下、運動教育）を意味している。この端緒は、1930年にウイリアムス(Williams, J.F.)が“education of the physical”の概念を身体面に偏った「つまらないもの(ludicrous)」と批判し、新しい概念として“education through the physical”を提唱したことにある。これ以降、身体教育は古い概念と位置づけられ、省みられなくなり、「身体教育」や「体育」の名の下、スポーツなどの運動教育に関する議論が中心となる。

しかし、子供の身体問題は、運動不足に限らず、睡眠不足や食生活の乱れなど、多岐にわたる。事実、18世紀後半に活躍したペスタロッチ(Pestalozzi, J.H.)を例に取ると、“physische Erziehung”において、運動のみならず、言語教育での発声、数学での描画、農事(飼育・栽培)や家事(料理・洗濯)、住環境など、身体に関わる全ての技能や衣食住に関する衛生が取り上げられ、しかも、それらの手段が全て、知・徳の精神面の育成につなげられている。

したがって、過去において、身体教育は決して身体面に偏った概念ではなく、ペスタロッチに代表されるように、幅広く、多義的な概念であったことが明らかとなる。

明治維新以降、日本の教育がペスタロッチ主

義に始まるなど、ペスタロッチの教育理論が当時、世界各国へ広がったことを考えると、彼の身体教育が世界各国へどのような影響を与えたのかを検討する必要がある。また、それ以前の身体教育を発掘する必要もある。

そこで、本研究は、過去における身体教育を発掘しつつ、その概念が消滅するまでの経緯とその概念の今日的復興に挑戦したい。また、先行研究では、身体教育を身体面に偏った「つまらないもの」と批判しているように、「身体」を生身の体である生体とのみ解釈し、「身体」を精神との橋渡しである媒体とは解釈していない。このため、先行研究では見落とされている二つの「身体」(生体・媒体)という、新たな観点からの検討に挑戦する。また、今日、「体育の日」が“Health-Sport Day”と訳されるなど、「体育」と「スポーツ」とが同義に用いられているが、その相違を明確にし、今日の問題点を明らかにすることに今後、挑戦していく予定である。

2. 身体教育の消滅の経緯

身体教育の概念が否定される端緒は、ヘルバルト(Herbert, J.F.)の“Allgemeine Pädagogik”(1806年)である。彼の場合、身体(生体)に関しては、教育の対象外と考えられている。このため、ペスタロッチで認められた身体(目的)教育という概念は否定されている。そして、身体的諸力の育成や健康の保持・増進などは、教育を行う以前の準備段階に位置づけられ、それに「身体養護(Körperpflege)」という概念があてはめられ、教育とは区別されている。

この身体養護は、医者などの専門家の役割とされるため、今日の学校教育において、保健室

や給食室や親に役割が分担されるなど、合理化されている。

また、ヘルバルトは、「教授」や「訓練」において、身体活動を通しての徳性の習慣化を企図している。すなわち、ペスタロッチにおける**身体(手段)教育**は、道徳的品性の陶冶という教育目的を達成する手段として、ヘルバルト教育学の「教授」と「訓練」に位置づけられている。そして、体操などの運動科目については、体操科教員の役割とされている。

ヘルバルトは、身体(生体)が精神に影響を与えることを理解していた。このため、生理学に基づいた「気質」の類型化が試みられている。しかし、疲労など、常に変化する生理的側面を固定的な気質に類型化しても、必ずしもあてはまるとは限らない。このような身体(生体)の合理化により、教育上、子供を理解しきれない部分を残すこととなる。

以上のように、ヘルバルト教育学は、身体問題を他の専門家の役割とするため、精神(知・徳)と身体の全面的な子供の育成にとって不完全な理論となっている。この理論は、明治20年代に日本を含む各国に紹介され、現在に至っている。

3. 身体教育の復興

ヘルバルトによって失われた身体教育の概念を復興するには、ペスタロッチへの回帰が不可欠となる。彼の“Denkschrift an die Pariser Freunde”(1802年)では、「基礎教育が個別的」や「一面的」であると、「基礎的でなくなる」と述べられている。例えば、知性の育成に偏った場合、「悟性の詐欺師(Charletan)」となる。この詐欺師は、「計り知れない程の知識」を持っているが、「家庭のことには無知」で、「仲間の間では役立たず」で、「諸義務を果たすこと」や「家族の幸福を築くこと」には「最も役立たずの人間」である。この他にも、「悟性の野獣(Bestien)」や「驢馬(Esel)」などが比喩として取り上げられている。特に「詐欺師」「野獣」「驢馬」の三つの比喩は、身体と徳性を取り上

げる際にも用いられており、どれか一面に偏った育成が「悪魔性」「激情」「愚鈍」「巧みさ」などのマイナス面を増強すると、繰り返し述べられている。

すなわち、幅広い知性に基づく識見と健康な身体に基づく活力を伴う徳性の育成には、知・徳・体の三つの「調和」が不可欠と考えられている。この調和の実践例として、ペスタロッチは、「一杯の水をテーブルから他のテーブルへ運ぶように指示」する場合、次の点に留意する必要があると述べている。

「第一に子供の身体的状態に注意を払い、第二に子供がコップの中にある水を覆さないかどうか注意し、そして、最後に言いつけたことがうまくなされたら、子供に微笑みかける。このように母親は、あらゆる場合に個々の言いつけに際し、子供の身体教育・知性の発展・心情の活性化に影響を与える。」

このように、ペスタロッチは、知・徳・体を上下関係ではなく、同等に尊重して鼎立している。そして、愛や信頼という徳性こそが三つを調和させる原則に不可欠と述べている。

4. 結言

今日、身体教育を具体化している一例として、荒川修作とマドリン・ギンズ(Gins, M.)の建築「三鷹天命反転住宅」を取り上げたい。「人間は死なない」と断言する点は無視するとしても、その建築は、人間の五感を刺激し、身体能力を引き出して成長を促すなど、便利さや快適さを追求する今日的建築とは一線を画す。五感の追求や居住への不安など、研究の余地はあるものの、過去の身体教育を復興する上で欠かせない概念をその建築は含んでいるといえる。

参考文献

- 1) Herbart "Allgemeine Pädagogik", Kehrbaeh, K., Flügel, O. Sämtliche Werke, 2Bd., 1989
- 2) Pestalozzi "Denkschrift an die Pariser Freunde", Buchenau, A., Sämtliche Werke, 14Bd., 1932